

# 解析力学 要点

神戸大学 学生番号 2233112s 原佑

2025年4月30日

## 1 Lagrange 形式の力学

### 1.1 Euler-Lagrange 方程式の簡潔な導出

$f$  は、 $x, y, y'$  で決まるものとし、汎函数  $I$  を、

$$I \equiv \int_a^b f(x, y, y') dx$$

とする。さて、 $I$  が停留値を持つような  $f(x, y, y')$  の形は何であろうか？ここで、停留値では、 $f(x, y, y')$  の形を少し変えた  $\delta I$  について、

$$\delta I \approx 0$$

が成り立つ。函数  $y$  は最初  $y_0(x)$  だったとする。これを、

$$y(x) = y_0(x) + \varepsilon \eta(x)$$

と変化させる。ここに、 $\varepsilon$  は函数形を司る微小量で、 $\eta(x)$  は任意の函数である。固定端条件として、 $\eta(a) = \eta(b) = 0$  であって、停留値をとる条件は、普通の微分で、

$$\lim_{\varepsilon \rightarrow 0} \frac{dI}{d\varepsilon} = 0$$

といえる。

ここで、函数  $f(x(u, v), y(u, v))$  において、

$$\frac{\partial f}{\partial u} = \frac{\partial f}{\partial x} \frac{\partial x}{\partial u} + \frac{\partial f}{\partial y} \frac{\partial y}{\partial u}$$

$$\frac{\partial f}{\partial v} = \frac{\partial f}{\partial x} \frac{\partial x}{\partial v} + \frac{\partial f}{\partial y} \frac{\partial y}{\partial v}$$

であることを思い出して、上を計算する。

$$\begin{aligned}
\frac{dI}{d\varepsilon} &= \frac{d}{d\varepsilon} \int_a^b f(x, y, y') dx \\
&= \int_a^b \frac{d}{d\varepsilon} f(x, y, y') dx \\
&= \int_a^b \left( \frac{\partial f}{\partial y} \frac{\partial y}{\partial \varepsilon} + \frac{\partial f}{\partial y'} \frac{\partial y'}{\partial \varepsilon} \right) dx \\
&= \int_a^b \left\{ \frac{\partial f}{\partial y} \eta(x) + \underbrace{\frac{\partial f}{\partial y'} \eta'(x)}_{\substack{\text{部分積分を用いる} \\ \text{固定端条件より } 0}} \right\} dx \\
&= \underbrace{\left[ \frac{\partial f}{\partial y'} \eta(x) \right]_a^b}_{\substack{\text{固定端条件より } 0}} + \int_a^b \eta(x) \left\{ \frac{\partial f}{\partial y} - \frac{d}{dx} \left( \frac{\partial f}{\partial y'} \right) \right\} dx \\
&= \int_a^b \eta(x) \left\{ \frac{\partial f}{\partial y} - \frac{d}{dx} \left( \frac{\partial f}{\partial y'} \right) \right\} dx
\end{aligned}$$

上は、 $\forall \eta(x)$  について成り立つゆえ、この値が 0 ならば、

$$\frac{\partial f}{\partial y} - \frac{d}{dx} \left( \frac{\partial f}{\partial y'} \right) = 0$$

である。以上より、Euler-Lagrange 方程式と呼ばれる、

$$\frac{d}{dx} \left( \frac{\partial f}{\partial y'} \right) = \frac{\partial f}{\partial y}$$

を得る。

解析力学の実用上では、一般化座標を  $q$ 、系の Lagrangian を  $L$  として、

$$\frac{d}{dt} \left( \frac{\partial L}{\partial \dot{q}} \right) = \frac{\partial L}{\partial q}$$

から、運動方程式を得ることができる。

## 2 Hamilton 形式の力学

### 2.1 Hamilton の正準方程式の簡潔な導出

Lagrange 形式の定式化では、Lagrangian が時間に陽に依存しなければ、一般座標  $q_i$  と一般速度  $\dot{q}_i$  を独立変数として力学を記述する。Hamilton 形式では、一般座標  $q_i$  と一般運動量  $p_i$  を独立変数にとり力学を記述せんとする。

一般運動量  $p_i$  は、

$$p_i \equiv \frac{\partial L(q, \dot{q}_i)}{\partial \dot{q}_i}$$

と定める。まずは、Lagrangian の全微分を考える。

$$dL = \sum_i \left( \frac{\partial L}{\partial q_i} dq_i + \frac{\partial L}{\partial \dot{q}_i} d\dot{q}_i \right)$$

上で示した Euler-Lagrange 方程式と一般運動量の定義から、以下を得る。

$$\begin{aligned} dL &= \sum_i \left( \underbrace{\frac{d}{dt} \frac{\partial L}{\partial \dot{q}_i} dq_i}_{E-L \text{ 方程式より}} + \underbrace{p_i d\dot{q}_i}_{\text{一般運動量の定義から}} \right) \\ &= \sum_i \left( \underbrace{\dot{p}_i dq_i}_{\text{一般運動量の定義から}} + p_i d\dot{q}_i \right) \end{aligned}$$

さて、いま、

$$d(p_i \dot{q}_i) = p_i d\dot{q}_i + \dot{q}_i dp_i$$

ゆえに、

$$p_i d\dot{q}_i = d(p_i \dot{q}_i) - \dot{q}_i dp_i$$

を得る。これを用いれば、

$$dL = \sum_i \left\{ \dot{p}_i dq_i + d(p_i \dot{q}_i) - \dot{q}_i dp_i \right\}$$

$$d \left( \sum_i p_i \dot{q}_i - L \right) = \sum_i (-p_i) dq_i + \sum_i \dot{q}_i dp_i$$

である。ここに、

$$H \equiv \sum_i p_i \dot{q}_i - L$$

とおけば、これはエネルギー量で、Hamiltonian と呼ばれる量である。上は、

$$dH = \sum_i \left\{ (-\dot{p}_i) dq_i + \dot{q}_i dp_i \right\}$$

と書ける。本式は Lagrangian の全微分の計算の帰結であった。今度は Hamiltonian を直接全微分して、

$$dH = \sum_i \left( \frac{\partial H}{\partial q_i} dq_i + \frac{\partial H}{\partial p_i} dp_i \right)$$

以上二式を比較すれば、以下の二式を得る。

$$\dot{q}_i = \frac{\partial H}{\partial p_i}$$

$$\dot{p}_i = -\frac{\partial H}{\partial q_i}$$

これらは Hamilton の正準方程式と呼ばれる。